

# 星の女

鈴木三重吉

青空文庫



## 一

姉妹<sup>きやうだい</sup> 三人の星の女が、毎晩、美しい下界を見るたびに、あすこへ下りて見たいと言

ひくしてゐました。

三人は或<sup>ある</sup>晩、森のまん中に、するれんの一ぱいさいてゐる、きれいな泉があるのを見つけてきました。三人ともその水の中へつかつて見たいと思ひましたが、そこまで下りていく手だてがありません。三人は夜どほしその泉を見つめて、ためいきをついてゐました。

そのあくる晩も、三人はまたその泉ばかり見<sup>み</sup>下<sup>おろ</sup>してゐました。泉は、ゆうべよりも、なほ一そううつくしく見えました。

「あゝ下りていきたい。一どでいゝからあの泉であびて来たい。」と、一ばん上の姉が言ひました。下の二人も同じやうに下りたいと言ひました。

すると、高い山のま上进行くのが大好きな、月の夫人がそれを聞いて、

「そんなにいきたければ、蜘蛛<sup>くも</sup>の王さまにそう言つて、蜘蛛の糸をつたはつて下<sup>おろ</sup>しておもらひなさい。」と言ひました。

蜘蛛の王さまは、いつものやうに、網の中にすわつて、耳をすましてゐました。星の女たちは、その蜘蛛の王さまにたのみました。蜘蛛の王さまは、

「さあ、下りていらつしやい。わたし私の糸は空氣のやうにかるいけれど、つよいことははがね鋼と同じです。」と言ひました。

三人はその糸につかまつて、一人づゝ、するゝと泉のそばへ下りて来ました。

泉の面には、月の光が一面にさして、すめれんの花のなつかしい香がにほひみなぎつてゐます。三人はきらびやかな星の着物をぬいで、そつと水の中へはいりました。

すがゝしい、冷たい水でした。三人はしづかにすめれんの花をかきわけていきました。三人のはだには、水のしづくが真珠のやうにきらゝ光りました。

と、その泉のぢきそばに、ある或若い獵人かりうどが寝てゐました。三人はそれとは気がつかないでにこゝろよくんで水を浴びてゐました。うとゝ寝てゐた獵人は、三人の天の女が、泉のすめれんの花をゆるがせて、水の中を歩いてゐる夢を見て、ふと目をさしました。ひぢをたてゝ泉の面を見ますと、まつ青にさをさしてゐる月の光の中で、三人の美しい女が、たのしさうに水を浴びてゐます。

獵人はこつそりと、泉の岸をつたはつて、三人の着ものがぬいであるところへいきまし

た。そして、その中の一ばんきれいな着ものを手に取って見ました。それは、金と銀との糸でおつて、いろさま／＼の宝石を使つて縫ひかざりをした、立派な着もので、左の胸のところには、心臓の形をした大きな赤い紅宝石ルビーが光つてゐました。

獵人は、その着物をかゝへて、もとのところへかへつて、かくれてゐました。

三人の星の女はそんなことは夢にもならないで、永い間水をあびて楽しんでゐました。そのうちに、だん／＼と夜あけぢかくなりました。すると、蜘蛛の王さまが空の上から、「もうおかへりなさい。お日さまがお出ましになると、お日さまのお馬が糸を足で踏み切ります。早く空へお上りあがなさい。」と言ひました。

星の女はそれを聞くと、いそいで岸へ上あがりました。二人の姉はすぐに着物を着て、目に見えぬ蜘蛛の糸の梯子はしごを上つて、大空へかへつていきました。

三人の中で一ばん美しい下の妹は、一しよにぬいでおいた着物がないのでびつくりしました。それがなければ空へかへることが出来ないのです、一しよけんめいにあたりをさがしましたが、見つかりません。

そのうちに、お日さまがお出ましになりました。お日さまのお馬は、蜘蛛の糸を足でふみ切つてしまひました。

星の女はとうにくれて、草の上にうつぶして泣いてゐました。さうすると森の鳥が起きて来て、

「あなたのうつくしいおめしものは、わかい獵人が取つていきました。その獵人は、あすこの木の下で、寝たふりをしてゐます。」

かう、さへづつて星の女にをしへました。星の女はそれを聞くと、すゐれんの花をつなぎ合せて花の着物をこしらへて、それからだをつゝんで、獵人のところへいきました。そして、

「どうか私の金と銀の着物をかへして下さい。そのかはりには、あなたのおのぞみになることは何でもしてあげます。」と、泣きくたのみました。獵人は、

「<sup>わたし</sup>私は何にもほしくはない。あなたが私のお嫁になつてくれゝば何にもいらぬい。」と言ひました。

星の女は、着物をとり上げられては、もう下界をはなれる魔力もなくなつたので、しかたなしに獵人のお嫁になりました。

獵人は、星の女をだいじにかはいがりました。星の女の姿は、すゐれんの花のやうに美しく、その声は、どんな小鳥の声よりも、もつとやさしくひゞきました。

獵人は毎日獵に出て、食べものを取つて来ました。そして星の女に、その日のいろいろの楽しいお話をしました。

しかし星の女は、そういう中でも、大空のお家<sup>うち</sup>を忘れることが出来ませんでした。女は、月のでる晩には、一人でするれんの泉のそばに出て、大空を見ては泣きました。せめて二人の姉の星が、もう一ど下りて来てくれればいゝのにと思つて、待ちこがれてゐましたが、二人はだまつて青い目をまばたいてゐるきりで、每晚蜘蛛の王さまが糸<sup>おろ</sup>を下しても、ちつとも下りて来ようとはしませんでした。

## 二

そのうちに、星の女には、つぎ／＼に男の子が三人も生まれました。星の女はその子たちが大きくなるのを、たゞ一つの楽しみにして暮しました。

そのつぎには、かはいらしい女の子が生まれました。星の女には、その女の子がかはいくつて／＼たまりませんでした。

或<sup>ある</sup>日<sup>ひ</sup>獵<sup>かり</sup>人<sup>うど</sup>の生れた遠い町からはる／＼<sup>つかひ</sup>使<sup>つか</sup>が来ました。獵人のお父さまが病気で死にかゝつてゐるといふ知らせです。獵人はびつくりして、

「私<sup>わたし</sup>はこれからすぐにいかなければならない。」と言ひました。星の女はそれを聞いて、「でもその長い旅の途中で、わるい獣にお殺されになつたらどうなさいます。」と言つて泣きました。獵人は星の女をなだめて、

「そんな心配はけつしてない。私<sup>わたし</sup>の父さまには私より外には子が一人もないのだから、どうしても私がいつて、やすらかに目を閉ぢさせて上げなければはいさうだ。おとむらひをすませたら、すぐにかへつて来る。どうぞ子どもたちと一しよにまつてゐておくれ。七日たつたらかならずかへつて来る。」と言ひました。すると一ばん上の男の子が、

「私<sup>わたし</sup>は父さまと一しよにいつて、お祖父<sup>ぢい</sup>さまを見て来たい。」と言ひました。獵人は、

「お前はみんなと一しよに家<sup>うち</sup>にゐて、どろ坊の番をしておくれ。」と言ひました。男の子は、

「それでは、この森の先まで一しよにいつて、そこからかへつて来るの。そして、母さまと一しよにお家<sup>うち</sup>の番をするの。」と言ひました。獵人は、その子をつれて森のはづれまで来ますと、



「もうこゝからおかへり。これは家のお部屋中の鍵だから、おまへにあづけておく。」と言つて、鍵のたばをわたしました。そして、

「よく言つておくが、どんなことがあつても、二階の小さいお部屋へはいつてはいけませんよ。そのお部屋の鍵穴にこの金の鍵がはまるのだが、あすこだけは、けつして開けてはいけませんよ。」と、いくども言つて聞かせました。男の子は分つたゝと、うなづきました。獵人は、

「では、なんにもこはいことはないから、おとなしく待つてお出で。」と言つて、わかれしました。

男の子はまた森をとほつて、お家へかへつて見ますと、お母さまが戸口に立つて、しく／＼泣いてゐます。男の子は、「どうして泣いてゐるの？ 私がかへつたから、どろ坊が来てもこはくはないでせう？」と言ひました。するとお母さまは、

「どろぼうなんかはちつともこはくはない。」と言ひました。

「それでは何が悲しいの？」

「だつて父さまは、もうこゝへかへつては入らつしやらないんだもの。」

「うゝん、さうぢやない。父さまはぢきかへると仰つた。」

「それから私も、もうお家へかへらなければならぬのよ。かへつたら、もう二度と出ては来られない。」

お母さまはかう言つて、またさめ／＼と泣きました。男の子は、

「そんなら私たち三人や、小さな赤ちやんをみんなおいていくの？」と聞きました。星の女は、さう言はれるとびつくりして、

「いや／＼、私はもうどんなことがあつてもかへりはしない。安心しておいで。あの赤ん坊やおまへたちをおいて、どうしてかへつていかれよう。」

かう言ひ／＼涙をふきました。男の子はそれで安心して、みんなと一しよにあそびました。

するとその晩、男の子は、外の月のあかりの中で、だれかぐうつくしい小鳥のやうな声で、しきりと何か言つてゐるので目がさめました。

聞いてゐると、その鳥のやうな声は、

「蜘蛛のはしごが下りてゐる、早くかへつてお出でなさい。」といふことを、かなしいふしでうたつてゐます。

そばで赤ん坊に添へ乳をしてゐたお母さまは、

「ねんねんよく。この子は私の紅<sup>ルービー</sup>宝石だものを、この子をおいてはかへれない。」といふ意味を謡<sup>うた</sup>でうたひながら、赤ん坊の寝顔を見つめてゐました。

すると、外からは、

「そんなら二人でおかへりなさい。紅<sup>ルービー</sup>宝石をだいて二人で。」と謡ひます。お母さまは、しばらく黙つてゐました。そのうちに、外の声は、また、

「蜘蛛<sup>はしご</sup>の梯子が下りてゐる。

おまへが七年ゐないとて、

星の二人は泣いてゐる。」

と、また謡ひ出しました。赤ん坊はふと目をさまして泣き出しました。お母さまは、そつとそのお背中をたゝいて、

「ねんくよ、ねんくよ。かへれくと言つたつて、玉の飾りの着物が無い。」と、悲しさうに謡ひました。

赤ん坊はまたすやくと眠りました。

それからしばらく、何の声もしませんでした。やがてまた外の月のあかりの中から、  
「鍵をおさがしなさい。お前の着物のかくしてある、小さなお部屋の金の鍵を。」と小さ

な美しい声で謡ひました。

男の子は、その謡を聞いてゐるうちに、一人でに、うとくと眠つてしまひました。さうするとその子の夢の中へ、二人の美しい女の人が出て来て、

「いゝ子だから、二階のあのお部屋の戸をあけて下さい。さうすればおまへのお母さまはもう泣きはしないから。」と言ひました。男の子は朝、目がさめると、お母さまに向つて、  
「私は昨夜、<sup>わたしゆうべ</sup>だれかゝお母さまに早くおかへりくと言つていくども謡つたのを聞いた。」と言ひました。お母さまは、

「おまへは夢でも見たのでせう。」と言ひました。そして、あとで一人でさめ／＼と泣きました。

男の子は、たしかに目をあいてゐて聞いたのですから、もしほんとうにお母さまがかへつてしまつたらどうしようと思ひく、いちんち昨夜の歌のことばかり考へてくらししました。

その夕方、男の子は、ゆうべ二人の女の人が、あの二階の部屋をあければお母さまはもう泣きはしないと云つたのを思ひだしました。そして、さうすればお母さまは、もう家へもかへりはしないだらうと思ひました。そのときお母さまは、下の二人の男の子と赤ん坊とに水あびをさせに、泉へいつてゐました。

男の子は、いそいで二階へ上つて、小さな金の鍵<sup>かぎ</sup>で、その部屋の戸をあけました。さうするとその部屋の中には、金と銀の糸でおつた、色々の宝石の飾りのついた、きれいな着物がかけてありました。

おろして見ますと、その着物の胸のところには、大きな紅宝石<sup>ルビー</sup>がついてゐました。飾りの宝石もその紅宝石<sup>ルビー</sup>も、ちようど夜の空の星のやうに、きら／＼とまぶしく光ります。男の子はびつくりして、その着物をお母さまに見せようと思つて持つて下りました。

しばらくするとお母さまは、二人の男の子と、赤ん坊とをつれてかへつて来ました。男の子は、

「母さま／＼、こんなきれいな着物が二階にありました。着てごらんなさい。」と言ひました。お母さまは、それを見ると、うれしさうにほ／＼ゑんで、すぐにからだにつけました。

子どもたちは、お母さまがその着物を着て、きれいなお母さまになつたものですから、よろこんで踊りまはりました。男の子は、

「父さまがかへるまで、毎晩貸して上げる。そして父さまがかへたら、私がたのんで、もらつて上げる。」と言ひました。お母さまは、

「今晚赤ちやんを寝かせるまで貸しといておくれね。」と言ひました。男の子は、  
「それまで着て入らつしやい。」と言ひました。

男の子はその晩は、いつまでも眠らないで、床の中で目をあいてゐました。さうすると、間もなくまた、外の月のあかりの中から、うつくしいこゑで、

「蜘蛛くもの梯子はしごが下りてゐる。

おまへが七年ゐないとして、

二人の星は泣いてゐる。」

と、小鳥のやうなうつくしいこゑでうたふのが聞えて来ました。

それから、しばらく何の声もしませんでした。こんどは、赤ん坊に添ちへ乳ちをしてゐたお母さまが、

「ねん／＼よ、ねん／＼よ。わたしのかはい紅宝石ルビーを、どうしておいていかれよう。」と、

謡うたひました。男の子は聞いてゐるうちに、ひとりでうとくと眠くなつて、お母さまの  
声がだん／＼に遠くの方へいつてしまふやうな気がしました。そしてそれなり、お日さま  
が出るまで、ぐつすり寝てしまひました。

男の子は朝、目をさまして、ゆうべの歌のことを言はうと思つて、お母さまをさがしま  
すと、お母さまはどこにもゐません。男の子は、

「それでは、するれんの泉へいつたのだらう。」と思つて、そちらへさがしにいきました  
が、お母さまはやつぱりそこにもゐませんでした。それでまた家うちへかへつて見ますと、お  
母さまばかりでなく、小さな赤ん坊もゐなくなつてゐました。男の子は、

「これはきつと、悪いどろぼうが、お母さまと赤ん坊をさらつていつたのにちがひない。  
をと／＼の晩からの美しい歌は、きつと、どろぼうが母さまをだましてつれ出さうと思つ  
て謡つたのだ。」と思ひました。見ると、お母さまに貸して上げた、あの玉の飾りのつい  
た、きら／＼した着物ありません。

下の二人のこどもは、母さまがゐない、母さまがゐない、と言つて泣き出しました。男  
の子は二人をなだめて、森の中をさがしてまはりましたが、どこまでいつて見ても、お母  
さまはゐませんでした。二人の子どもは、

「母さまがゐないからこはい。母さまがゐないからこはい。」と言つて、どんなにだましても聞かないで、いちんちおん／＼泣いてこまらせました。男の子もしまひには、

「母さま、かへつてよ。母さま、かへつてよう。」と言ひ／＼泣きました。二人の子どもは、お腹なかがすいてたまらないものですから、よけいにわあ／＼泣きました。

男の子は、そのうちにふと、お父さまからあれほどきびしくとめられてゐたことを思ひ出して、

「あゝ、しまつたことをした。父さまの言ふことを聞かないで、二階の部屋の戸をあけたので、あの美しい玉の飾りの着物までなくなつてしまつた。父さまがかへつたら、何と言はう、母さまや、赤ん坊がゐなくなつたのも、きつと私わたしが父さまの言つたことにそむいたばちにちがひない。」

かう思ふと、なほ／＼かなしくなりました。

間もなく日がくれて、美しい月夜になりました。男の子は二人の子どもを寢床へ寝かせようとしてゐますと、ふと入口の戸があいて、お母さまが、ゆうべの玉の飾りの着物を着てかへつて来ました。下の二人の子どもは、大よろこびで、お母さまに飛びつきました。

「母さまがゐないからこはかつた。」



「私も怖<sup>わ</sup>かつた。」と二人はかはる／＼言ひました。お母さまは、

「もう私<sup>わ</sup>がついてゐるから、何にもこはいことはありません。それよりも、みんなさぞお腹<sup>なか</sup>がすいたでせう。さあこれをおあがりなさい。」と言つて、大空からもつて来た、おいしい果物を分けてやりました。二人の子供はうれしがつて、どん／＼食べました。しかし一ばん上の男の子は、それを食べようもしないで、

「母さま、赤ん坊はどこへいつたの。母さまは私<sup>わ</sup>たちをおいていきはしれないと言つたのに、どうしてよそへいつたの。」と聞きました。お母さまは、

「赤ん坊は私<sup>わ</sup>の二人のお姉さまのそばで寝てゐます。私はこれからすぐにまたお家<sup>うち</sup>へかへつて、遠くから見えてゐて上げるから、みんなでおとなしくおねんねをするのよ。またあすの晩もおいしいものをもつて来て上げるから。」と言ひました。男の子は、

「それではその玉の着物をぬいでいつてね。父さまが、あのお部屋をあけてはいけなと言つたのに、私<sup>わ</sup>があけて出したのだから、父さまにしかられる。父さまがかへつたら、私<sup>わ</sup>がねだつて、もらつて上げる。」と言ひました。お母さまは、

「そんなことはいゝから、早くこの果物をおあがり。」と言ひました。男の子はさう言はれたので安心して、お母さまとならんで、そのおいしい果物を食べました。

さうすると、だん／＼に金の鍵のことも玉の飾かざりの着物のこともみんなわすれてしまひました。そしてお母さまが美しい着物を着て、美しい人になつてゐるのが、うれしくてたまりませんでした。

#### 四

男の子は、もうお母さまはどこへも出ていかないものと思つて、安心して寢床へはいました。すると、そのうちに、また、ふいと歌の音がするので目がさめました。ちつと聞いてゐると、やつぱりゆうべと同じ美しい声で、

「紅宝石ルビーがしきりと泣いてゐる。

日が出ぬうちにかへらねば、

馬の蹄ひづめが糸を切る。」

と謡うたひました。

お母さまは、ちやうど一ばん下の子どもが目をさましたのを寝かしつけてゐました。外

の聲が止むと、お母さまは、

「ねん／＼よ、ねんねんよ。この子はこよひつれていく。この子にこゝで泣かれては、わたし私もお空で泣くのだから。」と、言ひ／＼涙をふきました。

一ばん上の男の子は、またひとりでに眠くなりました。そして、

「明日は母さまにさう言つて、赤ん坊をつれてかへつてもらはう。さうすれば母さまはもうじぶんのお家へかへらないですむだらう。」と、かう思ひ／＼寝てしまひました。

あくる朝目をさまして見ますと、お母さまは、いつの間にか、一ばん下の弟と一しよに、ゐなくなつてゐました。二ばん目の弟は、母さまがゐないと言つてわあ／＼泣きました。

男の子は、

「泣かなくてもいゝよ。母さまは夜になればまた来て下さるから。」と言つて、なだめました。しかし弟は、何と言つても泣き止まないので、しまひには涙で目がまつ赤かにはれました。

そのうちに、日がくれて、空には星が一ぱい出ました。すると間もなく、入口の戸があらいて、お母さまがかへつて来ました。

二ばん目の男の子は、走つて来て、お母さまの手に取りついて泣きながら、

「二人きりでこゝにゐるのはいや。母さまのお家<sup>うち</sup>へつれてつて。」と言ひました。

お母さまは二人に頬<sup>ほほ</sup>ずりをして、またゆうべのやうな、おいしい果物を分けて食べさせました。一ばん上の男の子は、

「母さまはどうく二人ともお家<sup>うち</sup>へつれてつてしまつたのね。父さまがかへつたら、何と言へばいいの。」と心配さうに聞きました。お母さまは、

「それはまたあとでお話するから、早くお食べなさい。」と言ひました。

男の子は、ひもじくてたまらないので、急いで果物を食べました。そして、もう悲しいことも心配ごともわすれて、お母さまと楽しくお話をして、しまひに寢床へはいりました。男の子は明け方ぢかくに、ふと目がさめました。さうすると、また外に歌の聲がしてゐました。

「日が出ぬうちにかへらねば、

馬の蹄が糸を切る。

二人は夜どほし泣いてゐる。」

と、小鳥のやうな美しい声で謡つてゐます。お母さまは、二番目の子が目をさましたのを寝かせながら、

「ねんくよ、ねんくよ。この子が寝たらつれていく。あとでこの子に泣かれては、わたし私もお空で泣くのだから。」と、悲しさうに言ひました。

男の子はその歌を聞きながら、またすやくと寝入つてしまひました。

朝起きて見ますと、窓にはもう日かげがまつ黄色にさしてゐました。そして、お母さまも弟もみんなゐなくなつてゐました。

男の子はいちんち一人で泣きつゞけて、涙で目がまつ赤にはれました。

やがて夜になつて、大空に星がかゞやきはじめたと思ふと、また入口の戸があいて、お母さまがかへつて来ました。男の子はお母さまの手に取りすがつて、

「母さまはどうしてみんなをつれてつてしまつたの。父さまがかへつたら、びつくりするよ。早くみんなをつれてかへつてね。ねえ、母さま。父さまがかはいさうだから。」と、たのみました。お母さまは、

「そんなことはあとにして、早くこれをお上りあがなさい。」と言ひながら、空からもつて来た果物をたくさんならべました。しかし男の子は、いくらすゝめても食べませんでした。

お母さまは、

「それでは、これから私と一しわたしよに、おまへの大好きな赤ん坊と、あの二人の弟たちのと

ころへいきませう。さあお立ちなさい。」と言ひました。男の子は、

「私わたしは一人でこゝにゐる。父さまは、かへるまでちゃんとお家うちの番をしてお出いでと言つたから、私は一人で番をするの。」と言ひました。

「それでは私わたしはもういきますよ。父さまは明日かへつて入らつしやるはずだから、おかへりになつたらさう言つて下さい。母さまは、玉の飾りの着物を見つめましたから、もうお家うちへかへりましたと言つて下さい。母さまはこれまで長い間、毎日くどんなにお家うちへかへりたかつたか知れませんが、もう今晩きりで二どとこへは来ないから、よく母さまの顔をみておおき。それから父さまが、なぜ二階のお部屋をあけたとお聞きになつたら、二人の女の人が、夢の中で、母さまが泣いてゐてかはいさうだからあけてお上げと言つたら、開けたのですとお言ひなさい。」

お母さまはかう言ひくさめ／＼と泣きました。

「母さまのお家うちはどこにあるの？ こゝからよつぽどとほいの？」と、男の子は聞きました。

「それは、あとでお父さまにお聞きなさい。」

星の女は、かう言つて、間もなく空へかへつてしまひました。

## 五

あくる日になりますと、男の子はお父さまがもうかへるか、もうかへるかと思ひながら、いちんち戸口に立つて待つてゐました。さうすると、やつと夕方近くなつて、向うの森の中に、お父さまのかへつて来る姿が見えました。男の子は走つて迎へにいつて、

「父さま、<sup>わたし</sup>私はずるぶん悪いことをしたの。女の人が二人、私が寝てゐるうちに来て、母さまがかはいさうだから、二階のお部屋をおあけと言つたから、金の鍵<sup>かぎ</sup>であけたの。さうすると玉の飾りの一ぱいついた、きれいな着物があつたから、母さまに見せたら、母さまが貸してくれと言つた。そしてその晩、外からたれか<sup>うた</sup>謡をうたつて母さまをよぶと、母さまはその着物を着たまゝいつてしまつたの。」

かう言つて泣き／＼話しました。お父さまはそれを聞くとびつくりして、

「ごらんよ、<sup>わたし</sup>私のいふことを聞かないから、おまへたちはとう／＼母さまをなくしてしまつたぢやないか。しかしもう悔<sup>くや</sup>んでも仕方がない。お部屋をあけたことは、ゆるして上げ

るから、これからはけつして父さまのいふことにそむいてはいけないよ。母さまはそのうちには、おまへたちを見たくてかへつて来るかもわからない。これからみんなで赤ん坊のおもりをして、たのしくくらすことにしよう。」

かう言つて、涙をこぼしました。

「でも赤ん坊は母さまが、あの玉の飾りの着物を貸してくれと言つた晩に、一しよにつれていつてしまつたの。」と男の子は言ひました。お父さまは、

「赤ん坊もいつたのか。」と悲しさうに言ひました。

「しかし、あの子はお乳がないとこまるから、母さまのそばにゐた方が仕合せ。それで四人で一しよにくらしていかう。」

「でも母さまは、そのあくる晩と、またあくる晩に、二人ともつれてつてしまつたの。ゆうべは、私をつれに來たけれど、私は父さまがかはいさうだから、いかないと言つたの。」

男の子がかう言ひますと、猫人は、よろこんでき上げて、

「よくいかないでゐてくれた。それではこれから、どんなことがあつても、おまへは父さまのそばをはなれないかい？」と頼ずりをして言ひました。

「私は、いつまでも父さまと一しよにあるの。そして、父さまのいふことをよく聞くの。」



と男の子は言ひました。二人は、そのまゝ森の家でくらししました。

獵人は毎日、その子をつれて獵に出て、夕方になるとまた一しよにかへつて来ました。しかし男の子は、毎日お母さまのことがわすれられませんでした。夜になつて、大空に星がぱい出ると、男の子は一人で門口へ出て、そのたぐさんの星の中の、どれがじぶんのお母さまか、どれが妹か弟かと思ひながら、いつまでも空を見上げてゐました。

それから寢床へはいつて寝るときにも、いつもお母さまや妹や弟たちにあひたいとおもつて一人で泣きました。

そのうちに、お母さまたちがゐなくなつてから一年になりました。すると、或晩、夜中に、獵人は男の子を呼びおこして、

「こゝへお出で。早くお出で。父さまは急に気分が悪くなつた。」と言ひました。男の子はびつくりして、そばへいつて見ますと、お父さまはまつ青な顔をして目をつぶつてゐました。男の子は、お父さまの手をさすつて、

「今日はいくらまで歩いたからよ。あしたは獵を休んで家にゐませうね。」と言ひました。お父さまは、

「あゝ、くちびるがかわく。冷たい水を飲ましてくれ。」と言ひました。男の子は、おほ

いそぎでするれんの泉へかけていきました。お父さまはその水を一口飲むと、そのまゝすやゝと眠つてしまひました。男の子は夜どほし起きて、そばについてゐました。獵人は、とう／＼夜明けまへに死んでしまひました。男の子は、大声を上げて泣きました。

夜が明けると、男の子は泣き／＼木を切り集めて、お父さまの死骸<sup>しかい</sup>を焼きました。男の子は、もう、たつた一人でこの森にあるのはいやでした。でも、どこと言つていくところありません。男の子は、森の草の上に顔を伏せて、せめてもう一どお母さまにあひたいと思ひながら、日がくれるまで泣きつゞけに泣いてゐました。

やがて、太空には星がかゞやきはじめました。すると蜘蛛<sup>くも</sup>の王さまは、おほいそぎで下界にとゞく梯子<sup>はしご</sup>をつむぎ出しました。星の女はそれにつたはつて、泣いてゐる男の子のところへ下りて来しました。

男の子は泣き／＼お父さまのなくなつたことを話しました。お母さまも、さめ／＼と泣きました。そしてしまひに、

「もういゝから、泣かないでくれ。私は<sup>わたし</sup>、おまへがかはいさうだからむかへに来たのです。さあこれを食べて、一しよに母さまのところへいらつしやい。」

かう言つて、空からもつて来た果物を食べさせました。男の子はそれを食べると、一人

でに悲しさをわすれて、お母さまと一しよに、空へ上りました。

そのあくる日、二人の旅人が森をとほりかゝつて、獵人の家へはいりました。すると、家の中には人が一人もゐないのですから、二人は変に思つて、

「それでは、この家の人がかへるまで、二人でこゝに住んでゐよう。」と相談しました。しかし、家の人は、いつまでたつてもかへつては来ませんでした。二人の旅人は、とう／＼死ぬまで、長い間そこでくらししました。

二人はその間、いつも月のてる晩には、すゐれんの泉の中で、三人の女と、四人の子どもとが、楽しさうに水を浴びてゐる声を聞きました。そして明け方になると、かならず空の上から、

「おかへりなさい。お日さまがお出ましにならないうちにかへらないと、お馬が梯子をふみ切つてしまひます。」

かう言つて、みんなをよぶ声が聞えました。



## 青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系 第一〇巻」ほるぷ出版

1978（昭和53）年11月30日初刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集 第三巻」文泉堂書店

1975（昭和50）年9月

初出：「星の女 世界童話集第三編」春陽堂

1917（大正6）年8月

入力：tatsuki

校正：伊藤時也

2006年7月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 星の女

鈴木三重吉

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>